



彼は死んだ

彼は死んだ

そうこの部屋から 出て行ってから

そう思うことが 彼女の唯一の救いだった

愛した男が ドラッグで犯されていくのを

見ていられなかった

愛した男が 隠れて次々に女とドラッグに

手を出すのが見てられなかった

彼女は 決断した 別れようと言葉にした

男はその言葉に 腹を立て 違う女の所に

彼女の話全部聞く前に 荷物をまとめサッサと部屋から出て行った

彼女は出て行った瞬間 まだ別れた勢いがあるうちに

片付け始めたのは愛し合ったベッド

そこから 部屋の隅々まで 丁寧に彼を片付けた

彼の思い出を残さない為に

彼は メールでホームレスしてると当て付けに言う

彼女は 彼が今が幸せなら それでいい

でも 辛い思いをしてないのかが 心配で仕方がなかった

彼女は それから 食事も摂れなくなっていった

そして しばらく 何もする気がしなかった

苦しくて 空虚で 悲しくて 悔しくて

心が痛かった・・・どうして幸せになってくれないの！

（普通でいい ただの普通でいいのに何故？

友達もいろんな人と関わっていけるのに

ドラッグさえなければ

もう・・・どうして 別れた後なのに考えてしまうの？

もう・・・心配などせずに済む そうでしょ？

もう・・・自分も何だかも壊れてきそうよ

もう・・・いいでしょ？もう考えなくて ねえ？

もう・・・ もう・・・ もう・・・

自分で 自分に問う 気が狂いそう・・・

きっと彼は別れた悲しみなどない ドラッグを何度も何度も繰り返しているであろう

ドラッグで悲しみも何もかも飛ばすから

壊れた 玩具 みたいに ケタケタ笑いながら

それに笑ってるに違いない 現実逃避しているのだろう

目を瞑ればチカチカと輝く光線 早いスピードの頭の回転

彼には不安はない 怖いものなどない

それどころか充実感と多幸福感で一杯だろう

在る日 そう彼は死んだんだ！そう 死んでたんだ
死んでる彼を愛したんだ もう 死んだんだ 死んだんだ！
ホラ！ここには彼の物等ないでしょ！彼女は自分に狂ったように必死に言い聞かす

そう彼は死んだのだから 何処を探しても居ない

だけど彼との思い出ばかりが蘇がえってくる

彼との海

季節外れの海 波のしらべ 頬をすり抜けていく風

彼との夜景

虫の音 地平線に広がる沢山の明かり 森の香り

彼に生きてる証 生命の素晴らしさを見せているつもりが

思い出してみたらいつの間にか

自分の唯一の気晴らしの場所となってた

家に帰れば2人だけの陰気なドラッグの光景と戯言を

目にして聞かないといけないから

自分は偉大な人間だ！いつか成功する！

等と叶わない言葉を聞かなければいけない

思い出の場所すらドラッグでやられてる 彼女は更に笑った
その背中が 喜んでいるのか 悲しんで泣いているのか どうなのかももう解らない

唯 解ることはこの部屋に 彼の物はない 思い出の品も
彼の香りさえも・・・

いつか彼には現実というものがひたひたと

足元に忍び寄ってきてしまう

砂の城は波によって崩されていき

妄想という砂の城を維持するためには

現実の脅威に対して妄想を補強し続けなければならない

やがて 妄想が維持できなくなったとき

悲惨な現実にうちのめされてしまうだろう

彼女は最後に小さくこう呟いた

例え貴方が寝たっきりでもいい

人工的なドラッグよりも 人間らしい 弱いとか不安とか

色々マイナスな物があっても 全て包み込んで

貴方と唯 普通に幸せに暮らしたかった

唯 貴方が人として生きているだけで幸せだった

でも もう最後サヨナラ

彼は死んだ

そうこの部屋から 出て行ってから